

# 沖縄県宜野湾市新城下原第二遺跡出土の 貝殻集積の年代学的調査

Archaeological Report on the Chronology of Shell Accumulations  
Excavated at Aragusuku-Shichabaru 2 Site, Ginowan, Okinawa

KINOSHITA Naoko, SAKAMOTO Minoru and TAKIGAMI Mai

木下尚子・坂本 稔・瀧上 舞

## I 調査の概要

2018年11月30日、木下、坂本、国立歴史民俗博物館の藤尾慎一郎氏は沖縄県埋蔵文化財センターの新垣力氏と協議のうえ、宜野湾市<sup>あらぐすくしちやばる</sup>新城下原第二遺跡の調査によって出土した貝塚後期に比定された貝、あわせて5点を採取し、炭素14年代測定を行った。

以下、遺跡の概要や考古学的な知見（Ⅱ）を木下が、炭素14年代測定と同位体比分析の調査結果（Ⅲ・Ⅳ）を坂本・瀧上が行い、最後にまとめ（Ⅴ）を全員で行った（木下）。

## Ⅱ 新城下原第二遺跡の概要と貝集積の考古学的特徴

新城下原第二遺跡は沖縄県宜野湾市字安仁屋前原に所在する貝塚前1期から近代にいたる時期の複合遺跡である。遺跡は標高4.5mの海岸砂丘に立地し、北に白比川河口を望んで弓なりの海岸の一部をなす。1999年から2004年に工場建設にかかわる発掘調査が実施され、Ⅱ地区の川跡2の底面付近のV層で2基の貝殻集積が検出された〔片桐編 2006〕。このうち貝殻集積1から3個（No.4・15・34）、貝殻集積2から2個（No.8・11）を測定した（図1）。V層では阿波連浦下層式土器、浜屋原式土器が出土している。

貝殻集積1はイモガイ類34個からなる集積で（アンボンクロザメ23、クロフモドキ10、ヤナギシボリイモ1）、この中のアンボンクロザメ3個（no.4, no.15, no.34）を選択した。貝殻集積2はイモガイ類20個からなる集積で（アンボンクロザメ13、クロフモドキ7）、この中のアンボンクロザメ（no.8）とクロフモドキ（no.11）を選択した。いずれも外皮から楔状に小片を切り取って試料とした。

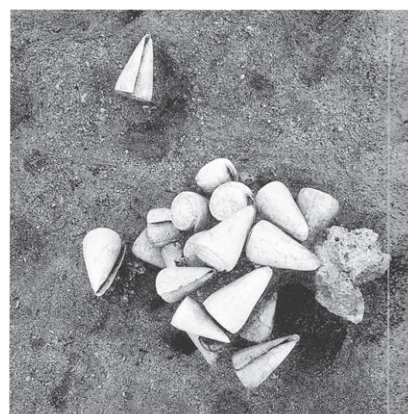
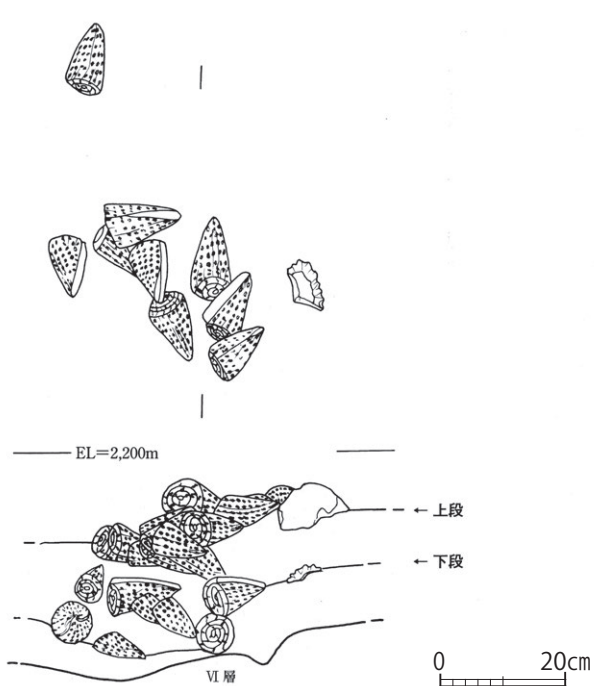
貝殻集積2では上下2段に別れた構造になっている点で、最下層のイモガイ類と最上層のそれとは20cmの高低差がある。一定の使用期間を示している可能性がある（木下）。

貝殻集積 1



貝殻集積 1 の出土状況

貝殻集積 2



貝殻集積 2 の出土状況

図 1 新城下原第二遺跡のイモガイ類貝殻集積出土状況

(片桐千亜紀編 2006:『新城下原第二遺跡』第 19 図, 図版 33, 図版 35 引用)

### Ⅲ 試料の処理と測定

2018年11月30日、沖縄県立埋蔵文化財調査センターにてイモガイ5点（試料番号：ONSSB-40, 41, 42, 43, 44）の提供を受けた。国立歴史民俗博物館の年代実験室で、ダイヤモンドホイールカッターを用いて外唇から楔状に200～300 mgの薄片を切り取り、（株）パレオ・ラボに送付して酸エッチングと加速器質量分析計による炭素14年代測定（AMS- $^{14}\text{C}$ 法）を依頼した（坂本・瀧上）。

### Ⅳ 測定結果

#### (1) 貝

測定結果を表1に示す。集積によらず、いずれの試料も2,300  $^{14}\text{C}$  BP 台の炭素14年代を示した。

各遺跡におけるローカルリザーバー効果（ $\Delta R$ ）を0と仮定し、較正曲線 Marine13 [Reimer et al. 2013] に基づき、較正プログラム OxCal [Bronk Ramsey 2009] を用いて算出した較正年代の確率密度分布を図2に示す。集積によらず、5点とも紀元前1～後1世紀の較正年代を示した（坂本）。

### Ⅴ まとめ

新城下原第二遺跡遺跡の貝殻集積の炭素14年代は、集積1と集積ともに貝塚後期前半の在出土器で推定される年代に整合し、弥生中期末から後期初頭併行期に対応する。二つの集積内ともに非常によく揃った年代を示していることは貴重である。遺構で一定の使用時間幅が推定された貝殻集積2も、比較的短い時間内に形成された可能性が高い。

### 謝辞

本調査にあたり、沖縄県埋蔵文化財センター所長の登川安政所長、中山晋氏、新垣力氏、片桐千亜紀氏のお世話になった。記して感謝の意を表します。

なお、本調査は、平成30年度新学術領域研究「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」（代表 国立遺伝学研究所 斎藤成也）、計画研究B01班「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」（代表 国立歴史民俗博物館 藤尾慎一郎）の成果の一部である。

表 1 新城下原第二遺跡貝殻集積出土貝の年代測定結果

遺跡	遺構	貝種	試料番号	部位	採取	測定機関 番 号	炭素 14 年代 ( $^{14}\text{C}$ BP)	較正年代 (cal)	備 考
新城下原第二遺跡	貝殻集積 2	アンボン クロザメ	ONSSB-44	外唇	小片	PLD-37752	2334±21	40BC-AD40 (1 $\sigma$ ) 85BC-AD80 (2 $\sigma$ )	no.11
		アンボン クロザメ	ONSSB-43	外唇	小片	PLD-37753	2360±21	75BC-AD15 (1 $\sigma$ ) 125BC-AD55 (2 $\sigma$ )	
	貝殻集積 1	アンボン クロザメ	ONSSB-41	外唇	破片	PLD-37751	2337±19	40BC-AD40 (1 $\sigma$ ) 85BC-AD75 (2 $\sigma$ )	no.15
		クロフ モドキ	ONSSB-40	外唇	破片	PLD-37749	2337±22	45BC-AD40 (1 $\sigma$ ) 90BC-AD80 (2 $\sigma$ )	
		アンボン クロザメ	ONSSB-42	外唇	破片	PLD-37750	2341±21	45BC-AD40 (1 $\sigma$ ) 90BC-AD75 (2 $\sigma$ )	no.34

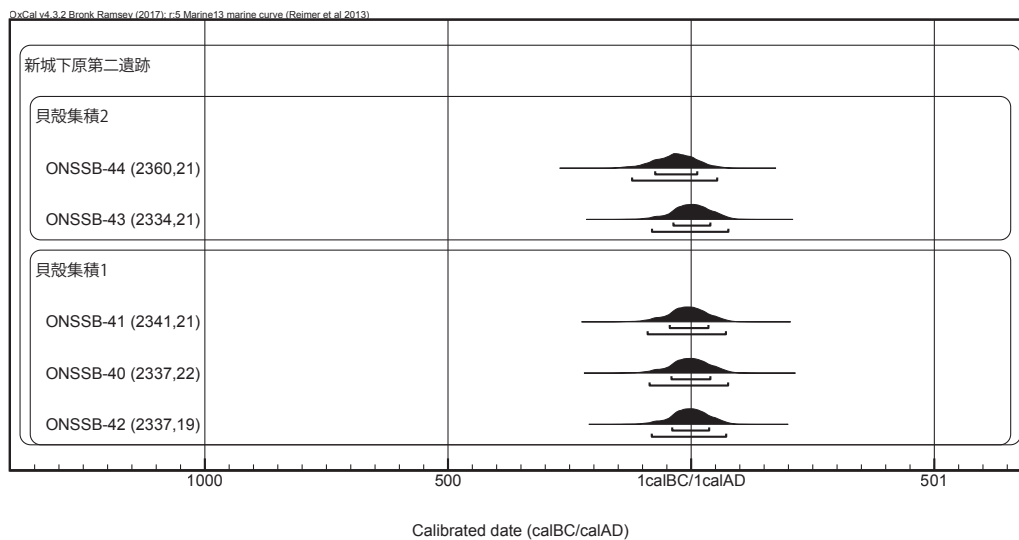


図 2 新城下原第二遺跡貝殻集積出土貝の較正年代の確率密度分布  
(Marine13 に基づき,  $\Delta R=0$  と仮定)

---

参考文献

---

- Bronk Ramsey, C. 2009: Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), pp. 337-360
- 片桐千亜紀編 2006 :『新城下原第二遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集, 沖縄県立埋蔵文化財センター
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., van der Plicht, J. 2013: IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), pp.1869-1887

木下尚子 (熊本大学人文社会科学研究部)

坂本 稔 (国立歴史民俗博物館研究部)

瀧上 舞 (国立歴史民俗博物館研究部)

(2019年5月10日受付, 2019年8月5日審査終了)